

河川舟運の盛衰と地域振興その 1

—登米、増田、及び、長井—

—先行論文調査、並びに、先行現地調査—

渡 部 順 一
石 原 慎 士

1. 初めに
2. 先行論文調査
3. 先行現地調査
4. 地域振興に向けて
謝辞、参考文献

キーワード：河川舟運、登米、増田、長井、地域振興

1. 初めに

(1) 背景

本稿は宮城学院女子大学人文社会科学研究所（以下、「人社研」）より、2020年度研究所共同研究費助成を受けた研究「河川舟運の盛衰と地域振興その1－登米、増田、及び、長井」¹（以下、「本研究」）について、その先行論文調査と先行現地調査から、地域振興に向けた指針を論じるものである。

なお、本研究は、継続して人社研より2021年度研究所共同研究費助成を受けた研究「河川舟運の盛衰と地域振興その2－秋田県横手市増田地区における実証研究」²、並びに、人社研より2022年度研究所共同研究費助成を受けた研究「伝統的野菜の継承に向けたCSA³事業に関する実証的研究－秋田県における『てんこ小豆』の保存活動の展開」⁴として発展的な調査、研究、及び、地域振

¹ 申請者 渡部順一（以下、渡部）、研究代表者 渡部、研究者 石原慎士（以下、「石原」）。

² 申請者 石原、研究代表者 石原、研究者 渡部。

³ Community – Supported Agriculture。地域支援型農業。

⁴ 申請者 石原、研究代表者 石原、研究者 渡部、舛井道晴（以下、「舛井」）。

興に向けての活動が行われている。

(2) 研究目的

①本研究の目的⁵

河川舟運とは、川、あるいは、運河において物資や旅客を運搬する輸送のことで、古代より行われ、近代以前の年貢米の輸送や商品流通に大きく貢献してきた。その一方で、河川舟運は物資のみならず、地域の文化・慣習を伝播するという面や、都市や河岸・津などと呼ばれる船着場集落の形成にも役割を果たしてきた。

しかし、明治中期以降、鉄道の開通や河川の改修、あるいは、陸上交通の発達により、徐々に衰退してきた地域も少なくない。近年になって、河川舟運で栄えた地域において、過去の遺産を活用して地域おこしを行おうとする機運の高まりが見られる。たとえば、宮城県登米市登米町は「みやぎの明治村」、秋田県横手市増田町は『蔵しっくロード』と称したり、山形県長井市は「重要文化的景観」として選定されるなど、改めて脚光を浴びてきている。

こうしたことを踏まえて、本研究の目的は、「東北における河川舟運の歴史の変遷をたどり、その歴史的背景、あるいは、景観を活かした地域振興について研究を行う」ことにある。

②本稿の目的

「集積」の概念から「河川舟運」により拠点が生まれ、街として発展していくなかで、本研究の対象地域のうち「その1」と題して、宮城県の北部に位置する登米市 登米町（以下、「登米」）⁶、秋田県の東南部に位置する横手市 増田町（以下、「増田」）、及び、山形県の南部に位置する長井市（以下、「長井」）に、現在伝統的建造物や遺跡が残っていることはなぜなのか、また、それを「街並み保存」として観光資源として活用しようとしている試み、そして、その課題について検討するために、本稿では、「河川舟運」、「登米」、「増田」、及び、「長井」に関する「先行論文調査」を行うとともに、「先行現地調査」について、これまでの研究成果を明らかにするものである。

(3) 研究方法

「登米」においては、2020年11月に宮城学院女子大学現代ビジネス学科学生（以下、「学生」）8人とともに現地を訪れ、「登米」の歴史や河川舟運に関する講演を受けて、河川舟運に関する遺跡、あるいは、観光資源を視察している。増田においては、2020年12月に研究代表者の渡部、共同研究者の石原は、学生19人とともに現地を訪れ、伝統的建造物の残る街並みを視察している。「長井」においては、2020年度に「長井」の歴史、観光、及び、フラワー長井線⁷に関する本学での対面講演、2019年10月の学生22名との現地調査、2021年度にWebによる「長井」の河川舟運に関する学生への講演、そして2020年11月学生17名との現地での河川舟運に関する遺跡、あるいは、観光資源を視察している。それぞれ、先行論文、あるいは、参考文献の開示、提供を受けて、質疑

⁵ 本研究「研究目的」より。本稿の内容と整合性を取るために、一部編集、改変。

⁶ 標記に注意。登米市登米町（とめしとよままち）。本稿では、「登米」を「とよま」とする。

⁷ Flower Nagai Line（山形鉄道株式会社）。2022年10月17日最終閲覧。

<https://flower-liner.jp/>

応答を行うとともに、視察では、写真、あるいは、動画の撮影を行い、質疑応答を行い、現況の把握に努めた。

これらの活動は、「人社研」の研究支援の他、学生の教育に資するため「実習費」の活用も行っている。そのため、学生より、個人、あるいは、グループでの報告書、振り返りレポートなどの提出を求め、折に触れて、発表会を開催している。ただし、その内容には、本稿には反映していない。教育活動と研究活動を分けて考えているためである。

その他、渡部、石原は個別に、数度の現地調査を行い、現地関係者との交流を深めている。本稿は、その結果得られた、研究内容、並びに、調査活動の成果のうち、「先行論文調査」、「先行現地調査」について開示するものである。

2. 先行論文調査

(1) 集積

中小企業庁（2000）によると、集積は、「地理的に接近した特定の地域内に多数の企業が立地するとともに、各企業が受発注取引や情報交流、連携等の企業間関係を生じている状態のことを指す⁸」とされる。地域の産業の力の源泉となっていて、地域の活性化に大きな役割を果たしている。

また、Porter（1990）は、「Cluster」として概念化して、「なぜ国が特定産業で成功するのか、それが企業にとって、また国の経済にとってどんな意味をもつのかを明らかに⁹しようとした。その上で、「そのコンセプトはやアイデアは、国より小さな政治単位または地域単位にも、すぐに応用できるのである¹⁰」と指摘している。河川舟運の盛衰は、この「集積」、あるいは、「Cluster」の概念に大きく関わっていると考えている。

(2) 河川舟運¹¹と集積

江戸期¹²には、「長距離輸送としての廻船航路」と「中短距離輸送としての河川舟運」があったという。「江戸幕府成立以後、城米（年貢米）による徴税制度の確立にともない、消費都市の江戸と物資供給基地の大坂を中心に、長距離物資輸送の需要が高まった。また、沿海部と内陸部と間で中距離の物資輸送に河川舟運が利用された」とする。

廻船舟運は、1619年に菱垣廻船として、江戸と大坂に航路が開かれ、その後、河村瑞賢により、1671年に東廻り航路¹³が、翌年には西廻り航路¹⁴が開拓されて、廻船航路が整備されていくことと

⁸ 中小企業庁（2000）。267頁。

⁹ Porter（1990）。邦訳43頁。

¹⁰ Porter（1990）。邦訳43頁。

¹¹ 苦瀬博仁「江戸期の水運におけるロジスティクス・システムの構築と都市の発展衰退」。

2022年10月17日最終閲覧。

<https://www2.kaiyodai.ac.jp/~kuse/pdf/edo.pdf>

¹² 1603-1868年。

¹³ 日本海沿岸の酒田から、津軽海峡を経て太平洋を回航し、東北地方と江戸を結ぶ航路。

¹⁴ 酒田から佐渡小木・能登福浦・下関などを経て大坂に至り、さらに紀伊半島を迂回して江戸に至る航路。

なった。

河川舟運は、「上流下流で水深が異なるため、大舟や小舟に途中で積み替え」たり、「河川を遡行の際は、帆を張って風を利用したり、人力で曳舟」を行ったり、あるいは、「大舟の輸送物資を急な浅瀬で分載したり、河岸への運搬を代行する」舩（はしけ）が利用されたり運行されていた。

結果として、「舟の遡行終点や中継地点」、「河川と河川の合流地点や分流地点」、「街道と廻船航路が交差する地点」、「城下町や宿場町」、あるいは、「神社仏閣や関所、番所」の所在地などに商業の拠点が生まれ、街として発展していくこととなった。

商業の拠点として、多くの商人が集まるとともに、自ら創業することに関心を持つ人材を育てたり、商業活動を展開する時に必要な機能を提供すること等により、「集積」が生まれ、今では、伝統的建造物として知られる多くの建物が建設されることにも繋がっていくことにもなった。

(3) 登米

①北上川¹⁵

「登米」を流れる「北上川は源を岩手県岩手郡岩手町御堂に発し、岩手県の中央をほぼ北から南に流れ、一関市下流の狭窄部を経て宮城県に入り、登米市津山町付近で北上川と旧北上川に分派し、石巻市北上町で追波湾に注ぎ、旧北上川は追川・江合川と合流して、石巻市で石巻湾に注ぐ」河川である。また、「その流域には東に北上山地、西に奥羽山脈の高峰が連なり、これらの山地から流入する数多い支川を合わせて北から南に流下する、幹川流路延長約 249 km（全国第 5 位）、流域面積約 10.150 km²（全国第 4 位）の東北最大の河川」でもある。

②北上川の治水の歴史¹⁶

「本格的な治水事業は藩政時代以降からと考えられる。江戸期には、仙台藩による改修が実施された。伊達相模宗直による河道付替（「相模土手」）及び川村孫兵衛が実施した北上川・追川・江合川の三川合流が有名である。これらの工事によって新田開発が活発になった他、北上川における水上輸送網が確立され、藩の財政を支えた」。

また、「明治期¹⁷に入ってから、国による工事は水上交通のための低水路工事が主体だったが、1910（明治 43）年の大洪水を契機に、洪水防御を主目的とした北上川第 1 期改修工事が開始された。新河道の開削、追波川の拡幅、北上川の分流施設建設などが実施されて 1934（昭和 9）年に完了し、現在の北上川と旧北上川の形になった」。

③「登米」の歴史¹⁸

「登米」は、「仙台伊達藩の一門として、13 代約 300 年にわたり、二万一千石の城下町であった。

¹⁵ 国土交通省東北地方整備局北上川下流河川事務所。2022 年 10 月 17 日最終閲覧。一部改変、編集。
<http://www.thr.mlit.go.jp/karyuu/history/kitakami.html>

¹⁶ 国土交通省東北地方整備局北上川下流河川事務所。2022 年 10 月 17 日最終閲覧。一部改変、編集。
<http://www.thr.mlit.go.jp/karyuu/history/kitakami.html>

¹⁷ 1868 - 1912 年。なお、1873（明治 5）年に、太陰太陽歴から太陽歴へ改暦された。

¹⁸ 「みやぎの明治村・登米」とよま振興公社。2022 年 10 月 17 日最終閲覧。一部改変、編集。
<http://toyoma.co.jp/>

歴代の当主は北上川の川筋を変えるなど数多くの事業を興し、民生の安定に努め明治維新後は北上川を利用した舟運による米穀の集散地として繁栄した。廃藩置県により登米県・水沢県の県庁所在地になったが、その後宮城県に統合された。明治6（1873）年、寺池村・日野渡村・日根牛村を合わせて登米村が構成され、また明治22（1889）年町制施行によって登米町が発足した。その後、2005年に、登米郡8町（迫町、登米町、南方町、東和町、中田町、豊里町、米山町、石越町）と本吉郡津山町が合併して、登米市が誕生することとなった。

④交通の変遷

明治時代でも、「登米」は北上川の河川舟運の船着き場の一つだったものの、明治時代中期に現在のJR東日本東北本線の前身である日本鉄道が開通¹⁹すると、北上川の河川舟運は次第に衰退していくこととなった、1921年には、東北本線と連絡して物資、あるいは、旅客の輸送を図る目的で、仙北鉄道登米線が開業したものの、1968年には廃止されている。

また、国道4号線は、「登米」より距離の離れた栗原市に整備されており、1960年代以降のモータリゼーションによるトラック輸送の波にも乗ることが出来なかった。なお、「三陸縦貫自動車道」が建設され、2009年に桃生津山IC²⁰登米IC間が、2010年に登米IC登米東和ICが開通しているものの「登米」には、ICは設けられなかった。なお、2011年の東日本大震災の復興道路として、整備されていくこととなる。

⑤現在の人口²¹

2020年の「国勢調査」による人口をみると、登米市全体では76,037人を数え、内訳は9地区の人口はそれぞれ、「迫19,741人」、「登米4,532人」、「東和5,760人」、「中田15,243人」、「豊里6,332人」、「米山8,528人」、「石越4,588人」、「南方8,288人」、及び、「津山3,025人」となっている。

⑥みやぎの明治村²²

「登米」には現在、「教育資料館（国重文：旧登米高等尋常小学校）や警察資料館（県重文：旧登米警察署庁舎）のハイカラな洋風建築物、廃藩置県時に置かれた水沢県庁記念館（旧水沢県庁舎）や重厚な蔵造りの商家など、明治を偲ばせる建物が現存している。また、少し横道に入ると藩政時代の武家屋敷や史跡が随所に残っており当時の面影を今に伝えて」おり、「それらの町並みから登米町は『みやぎの明治村²³』と呼ばれている」。

(4) 増田²⁴

①県内有数の商業地

「増田」は、「日本有数の豪雪地帯である秋田県横手市の南東部に位置しており、成瀬川と皆瀬川

¹⁹ 1890年、岩切、一ノ関延伸開業。

²⁰ Interchange. 高速道路、あるいは、自動車専用道路の出入り口。

²¹ 「国勢調査人口・世帯数の推移」登米市公式ホームページ。

²² みやぎの明治村・登米、とよま振興公社。2022年10月17日最終閲覧。一部改変、編集。
<http://toyoma.co.jp/>

²³ 総合案内／博物館明治村。2022年10月17日最終閲覧。
<https://www.meijimura.com/guide/>

²⁴ まちなみと内蔵「増田町観光協会」。2022年10月17日最終閲覧。一部改変、編集。

が合流する地点に立地し、江戸時代以前より人と物資の往来でにぎわった地域」である。「両沢目²⁵で生産された養蚕や葉タバコのほか、様々な物資の流通に伴って増田は県内有数の商業地」となっていった。たとえば、2015年に、内閣府による「女性が輝く先進企業表彰」で内閣総理大臣賞を受賞した北都銀行²⁶は、1895年に当時の増田町で設立されている。

「現在、商店街となっている『中七日町通り』は、明治の中頃まで「ホテル町」と呼ばれ、内蔵や裏庭など、家の奥にある施設に比べると質素な表構えの町並みであった」といわれていた。しかし、「商業発展のゆえに、明治の中頃からは細部まで特徴的な正面意匠をもった大型の町屋が立ち並ぶようになり、秋田県内の商業地の中でも大型で特徴的な景観を見せる」ようになった。

②伝統的建造物

「増田」には、「現在も、当時の繁栄を今に伝える伝統的な町並みや内蔵が多く残って」いる。2013（平成25）年には文化的な価値も非常に高いとの評価を受け、国の「重要伝統的建造物群保存地区」²⁷に選定された。「増田」の内蔵は、母屋の中にある土蔵であり、「内部に床の間を配した座敷間を有する『座敷蔵』が最も多く、内蔵全体のおよそ65%を占め」という。「この内蔵が建てられた始まりは、物品を収納するための「文庫蔵」がほとんどだったと推定されているが、増田地区では明治に入ってから、座敷蔵の数が格段に増加し、文庫蔵を座敷蔵に改装した例も多く」見受けられる。「こうした座敷蔵は、1階の入口を入ると手前に板の間、奥に座敷間を配する2室構成となり、2階は板の間の1部屋構成で、什器類を収納する文庫蔵としての機能を持って」いる。内蔵の多くは明治期から大正期²⁸のものである。

(5) 長井²⁹

①河川舟運の機運

江戸時代、江戸は100万人、京都は50万人、大坂は40万人の人口をかかえていたとされ、「その都市人口の食料を賄うために、江戸は関東平野の各地から、京・大坂は周辺の播磨平野、近江盆地から年貢米や余剰米を集めることは行われた」という。それでも、「爆発的な人口増加には追いつけず、江戸・大坂での米の価格はどんどん上昇し、交通不便な米生産地の米はだぶついて価格は停滞するという現象が起こり始めた。江戸幕府の成立する直前の江戸・米沢³⁰の米価の価格差はそれほどでもなかったのに、50年後の明暦元（1655）年には、江戸の米価は米沢の4倍にまで高騰

<https://masuda-matta.com/uchigura/>

²⁵ 「田子内沢目」と呼ばれる成瀬川の谷と「稲庭沢目」と呼ばれる皆瀬川の谷の総称。

²⁶ 北都銀行。2022年10月17日最終閲覧。

<https://www.hokutobank.co.jp/>

なお、2009年に、株式会社荘内銀行と経営統合し、持株会社であるフィデアホールディングス株式会社を設立している。

²⁷ 伝統的建造物群保存地区「文化庁」。2022年10月17日最終閲覧。

<https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/hozonchiku/>

²⁸ 1912 - 1926年。

²⁹ 高井（2020）。一部改変、編集。

³⁰ 長井は、江戸時代、米沢藩の領地であった。

した」という。河村瑞賢は、1671年に東廻り航路を、翌年には西廻り航路を開拓した。これにより、廻船航路が整備されていくこととなった。

②最上川上流水運開通

1692年、米沢藩の御用商人であった、京都の西村久左衛門と叔父の西村成正是、「大都市と僻遠の米産地米沢の米価の大きな価格差に着目し、米沢藩の江戸台所米を最上川を使って運び、その帰り舟で、塩・鉄器・綿・木綿・魚などの商品を移入することによって、より大きな利益があがると考え、最上川上流の航行権（左沢―荒砥―長井間）を与えて下されば、工事とその費用については全責任をもって、西五百川溪谷の難所を開削」と申し出た。米沢藩を通して江戸幕府の了承を取り付けて、「1694年には、舟を通すことに成功」した。

③長井の繁栄

「米沢藩では初め、下流から左沢・荒砥・宮（長井）・糠野目に他屋倉と称する造船所を作り船場としたが、上流の糠野目は増水期でないと舟が上れなかったため、最上川舟運の最終船場は宮船場であった」という。

「宮船場ができて舟の行き来がさかんになると、宮船場には米沢藩の陣屋がおかれ、米を保管する3棟の上米蔵が建てられた。また、近くには青苧を保管する青苧蔵も建てられた。宮船場は米沢藩の表玄関となり、米や青苧の収穫の終わった時には、米沢領内の各地から宮へ荷物を運ぶ荷車が賑やかに往来した。最上川を遡る帰りの舟には京・大坂・能登の商品が積まれ、町には問屋・商店が続々と出現し、それらの商品を運ぶ荷車で賑わった。長井は藩内屈指の商業都市に成長したのもこの頃からである」とされる。

なお、宮船場の位置は今の東廻り荒砥街道が最上川を横切る長井橋³¹西岸の南側にあり、民間の宮船場はこの北側にあった。ちょうど、最上川と野川が合流し水量が増す箇所の上流部にあたる。また、民間の小出船場は長井市小出のつつじ公園から土手に通じる道路の真東の最上川西岸にあった。

3. 先行現地調査

(1) 地域のマーケティング

Cotler et al. (1993)³²は、主に、アメリカ合衆国（以下、「米国」）の事例から、都市、あるいは、地域の盛衰を捉えて、「技術の進歩は、人々の生活、仕事、旅行、コミュニケーションの方法に最も強力な変化をもたらす」と論じている。また、「技術の進歩は必然的に一部の業界に打撃を与える」として、「自動車の発明により、馬車は時代遅れになったことと、高速道路、ガソリンスタンド、ドライブイン、レストラン、映画、そして石油産業の爆発的な成長にもつながった」とする。その上で、「場所のアイデンティティと価値は設計され、売り出される必要があり、自分自身をうまく売り込めない場所は、経済の停滞と衰退のリスクに直面」と主張している。

³¹ 山形県長井市に架かる橋。

³² 邦訳を参考にして、渡部が英文を日本語に要約。

また、和田他（2009）では、「地域資産を活かし、体験の『場』の提供を通じて、『買いたい、訪れたい、交流したい、住みたい』まちづくりを実践するために、いかに地域アイデンティティを確立するためのマネジメント手法」について論じている。

Cotler et al.（1993）、並びに、和田他（2009）を踏まえて、「登米」、「増田」、及び、「長井」について、場所、あるいは、地域の「アイデンティティ」³³として、河川舟運による繁栄の歴史的建造物、あるいは、遺跡（以下、合わせて「伝統的建造物等」）が、どのように活用されているかを中心に、3か所の先行現地調査を行った。

（2）登米

2020年11月の現地調査では、まず、教育資料館（旧登米高等尋常小学校）にて、とよま振興公社の学芸員より、「北上川改修の歴史と地域振興」と題して、講演を受けた。その後、学芸員より解説を受けながら、教育資料館内部の視察を行った。その後、バスにて移動し、「登米大橋」、「船着き場跡」、「脇谷洗堰³⁴・脇谷閘門³⁵」などを下車して調査した。「登米大橋」は、「登米」出身の実業家、渡辺政人（以下、「渡辺」）が1945年に第二次世界大戦中の物資不足にも関わらず、頑丈な鉄筋コンクリート製の橋として完成させたものである。河川舟運は廃れたものの、北上川の治水事業は現在に至るまで面々と行われてきたことが伺える。

また、これまでの現地調査では、教育資料館から徒歩圏内にある、警察資料館（県重文：旧登米警察署庁舎）、水沢県庁記念館（旧水沢県庁庁舎）、武家屋敷「春蘭亭」などの施設を調査した。1961年に戦前から集めていた伊達家関連の文化財などの収蔵展示施設として建設・寄贈した「登米懐古館」も調査している。同館は、横山大観作「天長地久之図」、池大雅作「竹之図」他、伊達家ゆかりの品々など貴重な文化財約350点を収蔵するが、そのうち約200点が渡辺からの寄贈であるという。（図1）

³³ identity. 心理学用語では、「自我同一性」。その地域がその地域であること。

³⁴ 1932年完成。洗堰（あらいせき）とは、「常時、あるいは、洪水時に、水を堰の上から越流させるタイプの堰」（公益社団法人土木學會）。

³⁵ 1932年完成。閘門（こうもん）とは、「水位の異なる水面を持つ河川や運河、水路に設けられた船を通行させるための施設」（公益社団法人土木學會）。



図1 教育資料館（旧登米高等尋常小学校）
（出所）2020年11月5日、渡部撮影

（3）増田

2020年12月の現地調査では、まず、増田の町並み案内所「ほたる」にて、増田町観光協会会長より、「増田」についての説明を受けた。その後、会長より解説を受けながら、増田蔵町通り（「中七日町」、並びに、「本町」）の調査を行った。特に、増田観光物産センター「蔵の駅」（旧石平金物店）では、内蔵内部まで視察を行うことが出来た。公開家屋19棟のうち、「増田」最古の見世蔵となる「佐藤又六家（佐藤家住宅）」など、10棟が国登録有形文化財となっており、これだけ密集して登録されているのは珍しい。現在では、秋田県横手市の一地区となっているが、江戸時代から大正時代にかけての「増田」の繁栄を色濃く残すものとなっている。

また、国登録有形文化財の「佐藤養助商店 漆蔵資料館」は、「材木や味噌醤油商いとした江戸時代より8代続いた大地主、小泉五兵衛の旧宅」であり、2022年4月より休館しているものの、漫画原画の保存に悩む漫画家などの相談窓口となる「マンガ原画アーカイブセンター」が移設されている。（図2）



図2 佐藤又六家（佐藤家住宅）
（出所）2020年12月5日、渡部撮影。

(4) 長井

2020年11月の現地調査では、まず、観光交流センター道の駅「川のみなと長井」にて、長井市教員委員会市史編纂専門員同行のもと、施設の脇を流れる最上川に残る船着場の跡で、江戸時代米沢藩の表玄関だった「宮船場」と藩内の商業発展を担った長井商人が作った「小出船場」を視察した。また、長井市宮地区で、350年前から呉服商を営み、幕末から明治、大正期における商家の遺構「丸大扇屋」跡、1878年建築で、現存する郡役所跡としては、全国2番目に古い「旧西置賜郡役所（小桜館）」を調査した。

最上川上流舟運の遺構として、「佐野原岩盤の舟道」跡も視察した。長井市教育委員会市史編纂専門員、高井耕次氏によると、「渇水期をねらって岩の上で焚火をし、岩質をもろくして打ち砕くという原始的な方法で、西岸7mを深さ1mけずりとり、1694年には舟を通すことに成功」したと言う。(図3)



図3 旧西置賜郡役所（小桜館）
(出所) 2020年11月19日、渡部撮影。

4. 地域振興に向けて

(1) 伝統的建造物を活かす

江戸期から明治初期にかけて、「登米」は城下町として、「増田」は河川と河川の合流地点として、及び、「長井」は舟の遡行終点としてそれぞれに発展の形態は異なっているものの、河川舟運を梃子に産業集積が進み、地域が繁栄するに至った。現在、「伝統的建造物等」として知られる歴史的遺産は、当時の繁栄を示し、その地域の「アイデンティティ」の核となっている。

ただし、「登米」で調査した、「教育資料館（旧登米高等尋常小学校）」は、1888年に建てられて、1981年に「重要文化財」に指定されたものの、1980年代半ばには、登米中学校の建て替えの際の仮校舎として使用されたこと、「増田」で調査した、「佐藤又六家（佐藤家住宅）」は、主屋の中に「増田」最古の店（見世）蔵が現在でも現役で使用されていること、あるいは、「長井」で調査した、「小桜館（旧西置賜郡役所）」は、第二次世界大戦終了（1945年）後においても、山形県の「地

方事務所」として使用されたことなど、いずれも、長期間にわたって活用されてきている。いずれの地域も、明治期中期以降、鉄道やトラック輸送の進展による地域の衰退が顕著であり、第二次世界大戦終了後の日本の高度経済成長の波から取り残されてしまい、新規投資が停滞してしまったことも、現在まで、「伝統的建造物等」として町並みが保存されてきた一因として挙げる事が出来るのではないだろうか。

(2) 促進要因

「高度経済成長の中で、日本の地方地域が均一化してしまい、その特色がはっきりしていないのではないか」という指摘がなされることも多い。その中で、当該3地域における「伝統的建造物等」は、地域の「アイデンティティ」の核として、重要な役割を果たしている。

教育資源として、小さいころから「伝統的建造物等」を目にして、折にふれて、学校行事などで訪れることにより、郷土の誇りとしての象徴として捉えられることもある。

また、こうした「伝統的建造物等」は、他の地域にはない観光資源としても活用することができる。歴史が好きな観光客、あるいは、古い建物が好きな観光客など、魅力を感じることも多い。

さらに、その地域に住まいする人々と観光などで訪れたその地域以外の人々が、「伝統的建造物等」を話題として交流の礎として、その地域の人々が気づかなかった地域資源の活用の道を開くなど、波及効果を得ることができる。この波及効果については、石原（2022）で詳しく検討していく。

こうしたことにより、「伝統的建造物」等を梃子（てこ）として、地域の魅力が増し、新たな地域振興の一助となる可能性を秘めている。

(3) 阻害要因

今回取り上げた「河川舟運」により発展した地域は、「明治期中期以降、鉄道やトラック輸送の進展による地域の衰退が顕著な地域でもあり、少子高齢化が進んでいる。結果として、人口が減少し、地域の「アイデンティティ」の次世代への伝承が難しいという課題を抱えている。

また、伝統的建造物等を目当てに訪れた観光客が一巡してしまえば、リピート観光客以外の需要しか見込むことが出来ない。今後も、地域の「アイデンティティ」として伝統的建造物等を観光資源として活用していくとすると、それらの維持、保存には、莫大な資金が必要となり、いかにしてその資金を確保していくのが、課題となる。

さらに、新たな観光資源の開拓や新たな産業振興の育成には、地域の「アイデンティティ」を持った人材の育成が難しいこと、あるいは、伝統的建造物等に加えて、さらに莫大な投資が必要となり、こちらもいかにしてその資金を確保していくのが課題となる。

結局、過去の遺産を食いつぶしていくしかなくなる可能性もある。

(4) まとめ

本稿では、「河川舟運の盛衰と地域振興 その1」として、「登米」、「増田」、及び、「長井」につ

いて、先行論文調査、並びに、先行現地調査を行っている。これまで、福島県南会津郡下郷町の「大内宿」など、街道についての調査、研究は進み、地域資源を活用した街づくりが行われてきている。

一方で、「河川舟運と地域振興」について、まだまだ調査、研究が充分ではないと考えている。東北には、廻船舟運の寄港地もあり、その寄港地に向けて、例えば、国の指定した一級河川である北上川、雄物川、米代川、最上川、阿武隈川、あるいは、阿賀野川など、多くの河川が流れ込んでいる。結果として、江戸期から明治中期にかけて、河川舟運が盛んになり、独自の経済、文化を育んだ地域も数多く存在する。そうした地域にもう少し目を向ける必要性を感じている。

(5) 今後の展開

地域振興は、今住んでいる人のためのものとなりやすい。結果として、古くから住まいしている人、あるいは、高齢者のための街づくりとして、捉えられることとなる。将来ための地域振興や将来その地域に住み続ける人のための地域振興が求められるようになるのではないだろう。

そのため、本稿、あるいは、本研究の知見を活かしながら、石原 (2021)、あるいは、石原 (2022) のような、それぞれの地域に埋もれているさらなる伝統的資源を掘り起こしていくことも重要になると考えている。その際には、その地域の人々のみならず、外部の若い人の視点も必要となるとも考えている。本学他、大学との連携を一つの鍵として、検討していくことが期待される。

(謝辞)

本稿は宮城学院女子大学より、2020年度研究テーマ「河川舟運の盛衰と地域振興その1－登米、増田、及び、長井」(申請者 渡部順一、研究代表者 渡部順一、研究者 石原慎士)として、「宮城学院女子大学研究所共同研究費助成」の支援を受けた研究成果の一環として執筆されている。ご支援をいただいた宮城学院女子大学人文社会科学研究所、並びに、宮城学院女子大学に深く感謝の意を捧げるものである。

参考文献

① 書籍

- ・中小企業庁編 (2000) 『中小企業白書 (2000年版)』大蔵省印刷局。
- ・Michael E. Porter (1990), *The Competitive Advantage of Nations*, The Free Press (土岐坤、中辻萬治、小野寺武夫、戸成富美子訳 (1992) 『国の競争優位 [上] [下]』ダイヤモンド社)。
- ・Philip Cotler, Donald H. Haider, and Irving Ren (1993), *Marketing Places – Attracting*
- ・Investing, Industry, and Tourism to Cities, States, and Nations, The Free Press (前田正子、井関俊、千野博訳 (1996) 『地域のマーケティング』東洋経済新報社)。
- ・和田充夫、菅野佐織、徳山美津恵、長尾雅信 (2009) 『地域ブランド・マネジメント』有斐閣。

② 論文誌・雑誌

- ・ 苦瀬博仁（2007）「江戸期における物流システム構築と都市の発展衰退」『海事交通研究』山県記念財団。89 - 102 頁。
- ・ 松浦茂樹（1995）「わが国における近代河川舟運（I）一利根川、淀川を中心に一」『水利科学』水利科学研究所 39 巻 5 号。31 - 49 頁。
- ・ 松浦茂樹（1996）「わが国における近代河川舟運（II）一利根川、淀川を中心に一」『水利科学』水利科学研究所 39 巻 6 号。14 - 34 頁。
- ・ 工藤吉治郎（1956）「溪口集落の性格（1）一秋田県増田町を例として」『東北地理』東北地理学会 1956 年 9 巻 1 号。1 - 7 頁。

③ 参考 URL

- ・ 苦瀬博仁「江戸期の水運におけるロジスティクス・システムの構築と都市の発展衰退」。2022 年 10 月 17 日最終閲覧。
<https://www2.kaiyodai.ac.jp/~kuse/pdf/edo.pdf>
- ・ 登米市公式ホームページ。2022 年 10 月 24 日最終閲覧。
<https://www.city.tome.miyagi.jp/>
- ・ 横手市公式サイト。2022 年 10 月 17 日最終閲覧。
<https://www.city.yokote.lg.jp/>
- ・ トップページ／長井市ホームページ。2022 年 10 月 17 日最終閲覧。
<https://www.city.nagai.yamagata.jp/>
- ・ Flower Nagai Line（山形鉄道株式会社）。2022 年 10 月 17 日最終閲覧。
<https://flower-liner.jp/>
- ・ 国土交通省東北地方整備局北上川下流河川事務所。2022 年 10 月 17 日最終閲覧。
<http://www.thr.mlit.go.jp/karyuu/history/kitakami.html>
- ・ みやぎの明治村・登米、とよま振興公社。2022 年 10 月 17 日最終閲覧。
<http://toyoma.co.jp/>
- ・ 総合案内／博物館明治村。2022 年 10 月 17 日最終閲覧。
<https://www.meijimura.com/guide/>

④ その他

- ・ 渡部順一（2020）「河川舟運の盛衰と地域振興その 1 - 登米、増田、及び、長井」『研究所共同研究費申請書』宮城学院女子大学研究所共同研究費助成。
- ・ 石原慎士（2021）「河川舟運の盛衰と地域振興その 2 - 秋田県横手市増田地区における実証研究」『研究所共同研究費申請書』宮城学院女子大学研究所共同研究費助成。
- ・ 石原慎士（2022）「伝統的野菜の継承に向けた CSA 事業に関する実証的研究 - 秋田県における『てんこ小豆』の保存活動の展開」『研究所共同研究費申請書』宮城学院女子大学研究所共同研究費助成。
- ・ 株式会社とよま振興公社、北上川下流河川事務所（2019）「北上川改修歴史探訪『伊達宗直と北上川展』」登米懐古館、2019 年 7 月 13 日から 8 月 18 日。
- ・ 株式会社とよま振興公社（2020）「北上川改修の歴史と地域振興」宮城学院女子大学講演資料、2020 年 11 月 5 日。
- ・ 高井耕次（2020）「最上川水運の盛衰」宮城学院女子大学講演資料、2020 年 10 月 6 日。

